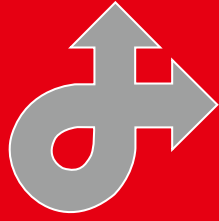


新制作

SHINSEISAKU



Vol.66/2013
新制作協会 広報誌

第77回展

国立新美術館 2013.9.18-9.30



審査陳列報告



絵画部

佐藤 泰生

今年の夏は異常とも思えるほど高温の日が続き、連日まさに炎熱地獄でした。そんな暑さの中、今年もたくさんの力作や意欲作が応募されました。作品に取り組んでこられた出品者の皆様には誠に敬意を表する次第です。

去る9月6日と7日の2日間、国立新美術館の審査会場にて厳正かつ丁寧な審査が行われ、また、17日に陳列と授賞会議が行われました。その結果今年の入選者、受賞者、新会員は以下の通りになりました。搬入者数432名、入選者数293名、入選者内訳は一般が235名、小品部門43名、データ部門15名でした。全体としては昨年に比べ若干の増加ということでした。授賞会議において新会員2名、新作家賞7名、絵画部賞4名、損保ジャパン美術財団賞1名が決まりました。新会員並びに受賞の方々そして入選の皆様おめでとうございます。

次に陳列のことです。今年は随分変わったという印象を持たれた方が多い

と思います。今回の陳列は昨年の壁面構成に若干手を入れ、会員を二階に、一般出品者を三階に展示しました。結果として何点か二段掛けになりましたが、全般的には比較的ゆったりと明るい展示になったのではないのでしょうか。まだまだ改善の余地があると思われませんが、少しでも見やすくパワーあふれる会場作りは作品点数と壁面の関係と同時に一点一点の作品の質も問われます。作品の大きさも一部会員に新美術館に合わせ大作化しているようにも思えますし、一般出品の150号の大きさの制限も見直しの時期に来ているのかもしれませんが。

さて、新制作の絵画部はどこに向かっているのでしょうか。新制作発足以来モダニズムの拠点と言われ久しいものがありますが、抽象、具象、インスタレーション、ポップ的な作品や具体的ようなものまでその表現の幅は広がっています。昨今は写真のデジタルに頼ったフォトリアリズム的な絵画や漫画やアニメの台頭と随分と平面絵画を取

り巻く環境は変化してきています。

絵画制作の困難さは21世紀に入りますます厳しくなっていると思われます。テーマの問題から空間やフォルムの造形的諸問題そして表現の多様さの中で我々の制作のアプローチはどこまで可能なのでしょうか。イメージとは何か空間とは表現とはと試行錯誤は尽きません。いつの時代でも上記の様々な事柄が制作をする意味としてそれぞれの作家が問われていると思われれます。明るく肯定的に言えば、新制作という場において、描くことの素朴さと崇高さを自認しながら共に切磋琢磨して行ける熱い会で在りたいと願っています。

彫刻部

田村 史郎

今年度の審査の報告を致します。今年度の審査は去る9月6・7日、例年通り静寂の中粛々と執り行われました。経過として、一般入選者は89名（うちデータ審査7名）、作品数は145点（データ審査7点）で、その中から入





選者は65名（3名）、入選点数は70点（3点）でした。初入選は6名、再入選は59名です。

ちなみに昨年度の搬入者は95名、作品数は147点で、入選者は73名、78点でした。今年は常連の入選者が落選するなど、例年になく厳しい審査になったという印象です。入選作はある程度の表現力が感じられるものの、落選作の中には、デコラティブに過ぎ素材の持つ力・良さを生かし切れずにいる作品、あるいは中途半端な仕事で何を表現したいのか伝わらない作品が多くありました。

「100人いれば100通りの表現がある。」と云います。出品者の方には時間が掛かろうともおおいに試行錯誤を繰り返し、その体験を活かし自己の表現を創り上げて貰いたいと思います。

データ審査は一般審査と同日に行われ、比較しやすく一般出品者の審査とともにスムーズに進行したことは評価できると思います。出品作の長所を少しでも多く取り上げようとする審査員

の方々と、審査進行の司会を担当したメンバーの協力に感謝致し、第77回展の審査報告といたします。

スペースデザイン部 下山 肇

審査について／スペースデザイン部には、展示サイズや方法、場所の違いによる区別がある。床置き・床（暗室）・屋外・壁・宙づり・ミニアチュールと様々だが、毎回バラエティにとんだ作品が集まる。それぞれについて以下報告したい。床置き・屋外展示作品は年々出品者が減ってきている。必然的に入選しやすい分野と言えよう。特に屋外は穴場である。体験型作品のコーナーは来場者から大変好評であった。次年度以降も展開していく。また、一時期は木工作品が多く見られたが、最近はあまり目立たない。公募の中にも流行があるのだろうか？

壁面・宙づり展示作品は毎年出品してくださる作家さんや、新しく出される方が比較的大勢いらっしゃる、活気がある分野である。特に女性作家の活

躍が目覚ましい。

ミニアチュール作品は導入されて5年たち、大分認知されてきているようだ。安定した応募数にもそれが現れる。手軽さが売りの分野であるため応募数も多いが、割合として質の低い作品が多く見られることも否めない。陳列について／審査が終了し出展作品の数や姿が決定した時点で、陳列委員が全体のイメージを整えながら入念にレイアウトプランを作成していく。陳列当日は限られたスペースを有効に活用するためいくつかのコーナーに分けられ、会員がチーフとなりレイアウトプランに基づいて粗配置していく。最後にコーナー同士のバランスをみて展示が完了する。

宙づり、壁面、床置きの順で配置していく方法が確立されており、近年は比較的スムーズに陳列を終えられるが、会場の設備に依存しなければ展示できない作品は、その場での臨機応変な対応も必要なため、時間がかかってしまうことは毎回の問題点である。



鶴見 雅夫
『THE FOUNDER アトリエの軌跡・77』
リトグラフ、45.5×45.5 cm

『賞牌』

第77回展新制作協会賞及び新作家賞受賞者に贈られました。



美術館探訪 ②

神戸市立小磯記念美術館

絵画部会員 石坂 春生

この美術館は1992年、ご遺族によってアトリエにあった遺作を神戸市に寄贈され、その作品を中心に設立されたものです。

場所はご自宅があった御影の真南にあたる、人工島六甲アイランドの入口の駅を降りた所にあり、回廊

風の瀟洒な建物で自宅の一部であったアトリエをその中庭に再現されており、その中には先生が描かれたモチーフ等がおかれております。

小磯記念美術館には約2500点の作品があり、常設は年間何度か入替えがあります。外観のタイルの色は生前、先生が気にいっておられた李朝の壺の色であることも知っていただければと思います。



上・ホールより移築・復元されたアトリエを望む
下・アトリエ内部 (写真提供：神戸市立小磯記念美術館)



「描く婦人」1978 (出典：小磯良平遺作展図録、読売新聞大阪本社、1991)



兵庫県神戸市東灘区向洋町中5丁目7

TEL：078-857-5880

定休日：月(月が祝休日の場合はその翌日)

小磯良平先生のエッセイ 「無題」

今度200号をはじめて描いてみた。元来私は大作を好まない、と云っても他の人達も皆たいした立派な体でないのにデカイものを平気でやっているの、私の言も理由にならないかもしれないが、私はなぜかこれを理由にしたい様な気がする。200号と云うと絵としては大作だと思う。200号であれば相当の心構えをもってかからないといけない。構成に準備が必要だ。私も恥をしのんで勉強だと思ってやって見たがいけない、苦しかった、次から次に不満が出て来てどうにもならない。他の人達は矢張よく勉強して経験をつんでいるのだなと思った、今では300号が普通になっている。600号ですら平気でやる人がいる。しかし大体において日本でまだ200号以上のもので構図らしい構図を拝見出来ないのは残念だ。それは画因が昔とは変わって来ているし、作画の動機において必然的なものを感じ得なくなっているのじゃあるまいか。本当は何かもっと確な根拠によってなされるはずの仕事の分野があるのじゃなかろうかと私は思っている。

又一面においては大作の構図についての経験と考察にとぼしいのじゃなかろうか。技術においても根本的にたりないものを感じる。さきに私は体力と云ったが以上のべた心構えに対する自信力の余裕と云う様なものの事である。しかしこれも経験から来る自信力の養成も一つの方法であるだろう。が私は100号までのものでもっと勉強しなければならぬと思う。100号までならなんとか目もどく、注意がゆきわたるだろう、こう云う意味で体力がないと云ったわけだ。

実際体力と云えば、私は自分の体を十分に用いて仕事をしているので、一寸晩にシネマを見たり、酒のみあるいたりした時は次の日の調子がくるって来るのでどうも不自由だ。すこしも余裕と云うものがない、こんな事で西洋の絵かきの真似は出来そうにない。日本人の勉強す

る人達でも私より勉強するだろう。体力よりも意志の力かもしれないが、如何にも丈夫そうな体つきの人々を見るとうらやましい。パレットや筆までがそんな人達のための寸法に出来ている様に思われる程だ。だから私は如何にも多忙でも晩には仕事しない、朝9時半頃からひるまで、ひるから1時間やすんで夕方暗くなるまではとに角やる。丁度会社員のおつとめの様だ。他にも理由がある、それはアトリエが一寸はなれているので晩にかけのがこわいのだ、こわい等云うと笑う人がいるだろうが、本当にこわい様な気がする、こわくない人があるなら一晩私のアトリエで過ごしてみろ。

この様にして私はまるでおつとめの様に規則正しくやむを得ずだが勉強しているが、これでやると体力をつないでいる。他の人々の勉強ぶりがうその様に思われる程だ。だから私は猛然とスピードをかけて勉強するとか、徹夜でやっつけるとか云った芸当は出来まい、いかに多忙でもいかに暇でも勉強のスピードは同じだ、なさけないが事実だ。私の性質がそうであるのかもしれない。あわてた時でも糞落ちつきの真似していたい方であるし、それかと云って暇な時は矢張ゆっくりやっている。私の体力の範囲で出来る仕事をぼちぼちさせてもらいたいものだ。来年からそうしてやろう。今年は友達にアジられてうかと200号に手をつけて実に苦しんだ。私の性質にあわない仕事はしないがいい。自分の分を知る事にこした事はない。

それにしてもヴェロネーズのあのどっかい大体、等身大の人間が二万一千三百人もいる様なやつをどうして描いたものだろう。あたりをつけるだけでも考える事も出来ない。ピカソのパリ博覧会のスペイン館の壁画のあのたくましさ、これは写真でより見たことないが物凄そうだ。日本人で誰かやってみてくれ。まずいのはごめんだが。私は矢張自分の分をまもう。

『新制作派』第2号(昭和12年11月刊)

77回展企画・展示風景

■ 絵画部《オープントーク》

3階からスタートし4班に分かれて行われました。その区画に飾られている人を会員が批評します。それぞれ有意義な意見が多く、そのことを聞いて作画に反映されれば必ずや進歩すること間違いのないと思われました。

《ギャラリートーク》

ある作家自身の作品について本人が語る機会はあまりなく、たいていは他の作品について述べています。会員本人のワールドが見えてこんなに楽しいことはないと言っていました。

《チャリティー展》

出品された会員の方々のおかげで世の中に役立つことができました。出品して下さった会員の方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

《グッズ販売》

缶バッジは絵画部の定番のようになってきて、周知されるようになりました。売れ行きもよく次年度のグッズ数は増える見込みです。

■ 彫刻部《オープニングトーク》

第77回新制作展初日、彫刻部では授賞式と懇親会間の時間を使い、今年から展示会場でオープニングトークを行いました。今年の実賞者と新会員の方々に自分の作品を前にして話を

して頂くという企画で、新会員3名、新作家賞4名 協賞賞1名(受賞者6名内1名欠席)。

各自多少緊張気味の様子でしたが、皆様話し始めるとすっかり熱くお話しされ、会場のお客様はじめ関係者もよく聞き入っており、思っていた以上に好評でした。今年この企画は、話しをする方を前もって決めておいたのが良かったかと思えます、是非来年もこの企画を継続して頂きたいと思えます。

《ギャラリートーク》

企画委員会案で行った。進行の冒頭私は、73年前彫刻部を設立された7人の年齢を紹介させて頂いた。本郷新34歳、山内壯夫32歳、吉田芳夫27歳、舟越保武27歳、佐藤忠良27歳、柳原義達29歳、明田川孝30歳、改めてその若さに驚かされる。そして今まで時代を走り続けてきた新制作彫刻部には、常に若者が生き活きと作品を発表してきた。それが新制作の遺伝子に違いない。そんな思いで今年のギャラリートークは、今の若者の才能に注視して五十嵐芳三、澄川喜一、大国丈夫さんのお3人に、受賞者を中心に、その他注目する若手数名を紹介して頂いた。驚いたのは、紹介された作家たちが、自分の作品に多くの言葉を持って熱く語ったことだ。寡黙な作家は一人としていない。この若者達を世の中

に紹介し育てていく重責を私にとっては痛感する場でもあった。2時間以上立ったまま会場を回って頂きお付き合い頂いたご来場の皆様からも、多くのご質問を頂き会場一体となり賑やかに過ごす事が出来た。この場をおかりしてご来場頂きました皆様に心から御礼申し上げます。

■ スペースデザイン部

《レクチャー》

第77回展も好評のうちに終わりました。SD部の展示はこれまで壁かけ、床置き、宙吊りの作品や暗室、野外の展示など多様な空間表現をしてきました。今回新たに、直接作品に触れたり座ることの出来るブースをつくり、多くの人達にその魅力を体感して頂きました。

一方、4回目を迎えたレクチャーはSD部企画として定着してまいりました。今回は「木のはなし」をテーマに会員の山下勤太郎氏と立花克樹氏を迎え、お二人の作品や創作のプロセスなどを現場の写真を交えた解説や制作の裏話など、貴重な話を伺うことが出来ました。満席の来場者からも大変好評を頂き、引き続き展示会場で行われたフリートークでも出品者や来場者が自由に対話出来る意義のある時間を過ごせました。今後も魅力ある展覧会を目指します。



新制作生みの親・育ての親

〈10〉

絵画部会員 荒井 茂雄

みなさん、こんにちは。今年の夏は尋常ではない猛暑でしたがみなさんはお元気ですね。さて、今回は『美術手帖』（1954）9号に新制作彫刻部の山本常一氏を同彫刻部の舟越保武氏が訪問している文が掲載されていますがこの文体が仕事仲間の温かさで人間味に溢れていますので記載しました。



【訪問】彫刻家・山本常一

【文】彫刻家・舟越保武

裏木戸を開けると、も一つの木戸がある。小さな鈴が下がっているのですその紐をひく。誰もいないのか返事がない。勝手知った私はその木戸をうまく開けて忍び込んだ。

静まりかえった仕事場の一角で、「アー、アー」とだしぬけにカラスが鳴いた。自慢の白カラスである。私は、雪国の暮色の中にあるような妙な幻想に誘われる。カラスの声は特殊な物憂さを持っている。

その時アトリエの奥の部屋で、白いものがムクリと動いた。当主山本常一氏である。太いお腹を仰向けに先生は昼寝の最中であった。「失敬しました」と言葉は丁寧であるが調子に弾みがある。以前東宝撮影所の美術部で活躍していたので、そこの調子が残っているらしい。アトリエの土間（たたきになっている）には随所に椅子があって腰を降ろせるようになっている。南面の小さな庭と、アトリエの東西の壁面は鳥籠でいっぱい。陽の入る朝など、小鳥の声で、いとも賑やかである。その大小さまざまな野鳥達の、線の細い姿態の中であって、当主の常さん（ツネさんではない、Joeさんである）の何とムクツケきこと。

「これ今やりかけているんだが」といって作りかけの塑造にかけた布を除いて見せてくれる。「それからこれもやってるのだが」…「それと、も一つこれはどうだろう」いや作りかけのあることあること。先ずこの多作によって圧されてしまう。次から次と楽しそうに作って行く、この精力に気圧される。伊達に太っているんじゃない。しかし私は彼の仕事に一種の反撥を感じる。（数作たったって仕様がでないではないかと考える。が、待てよ。五つの中に一つでも良いものが出来たらいい

ではないか。私のように、彼が五つ作る間にたった一つ作って、それがつまらないとなると、これは元も子もない。）

何しろ好適な環境に違いない。この環境は彼自身で作り上げたものだ。こんなに楽しくまめまめしく活動する彫刻家を他に知らない。小鳥のように華奢な感じの奥さんと二人の子供（上の子は豪傑である）それに姉さんと姪さんの六人家族。そのみんなが、常さんの彫刻と鳥の生活に協力してビタリ呼吸が合っている。して見ると常さんは相当なワンマンなのかも知れない。ともすれ彼の家は明るく楽しく出来ている。私は仕事に詰まって、くさくさして頭が重いときは彼の家を訪ねることにしている。彼は決して暗い顔を見せない。暗い話もしない。いつも脂がのっていて、こっちの気持を弾ませてくれる。そして彼の思いやり、義理固さ、彫刻に関係ないといえどそれまでだが、なかなか出来ることではない。

朝早く訪ねると彼は三十以上もある鳥籠を一つ一つ丹念に洗って掃除している。ヒワ、ヤマドリ、ギンバト、カケス、ヒヨドリ、コジュケイ、フクロ、キツツキ……（他の名は何べん聞いても忘れてしまう）。小鳥屋にいる小鳥と違うのは、彼は彫刻のモデルに使う為形を主にして選んでいるせいであろう。いわゆる家禽はいない。殆どが野鳥である。彼は始め鶏をよく作っていた。それがいつの間にか、更に線の鋭い野鳥に変わって来ている。常さんの説明で解ったのだが、小鳥の形は、その習性に従って彼の強さがそれぞれ違うらしい。彼はそういうことを詳細に観察して仕事をすすめているのだろう。

沢山の小鳥の中に生活していることが、彼の制作に、時々説明的な煩雑さを持たせるように思われる。小鳥に対する愛情がわざわざしている。それぞれの特徴を詳しく知っているだけに、どうしても省略出来なくなる。それが近視眼的な鎖主主義に陥って行くことを自戒しなければならない。そんなことは常さん先刻承知、彼は表面写生に抵抗して、単純化された形の美を負うことを仕事の重点としていることは、いくつかの作品によって理解される。一昨年秋の新制作に発表された「カラス」にしても、首を水平にのばした「アヒル」にしても、彼の意図したものがよく表現されている。単純な形の追求が素材のブロンズとビタリ合って、可成りよい効果を収めている。永い間の観察によって、眼の中でデッサンし尽くされ、無理のない単純化が行われ

ているのだ。

眼で見ただけの写生ではあの形は生まれえない。彼は毎日ように鳥たちを抱いて世話しているのだ、彼の掌を通して伝わる鳥の形は、きっとあのようなものだろうと思う。彼の数多い作品の中で、そのような触覚的な美しさを持ったものを私は好んでいる。

鳥を両の手でおさえたときのその量感、滑らかな羽毛を通して伝わるそのぬくもりと、心臓の戦きと。それを常さんが粘土で捕らえたとき、末梢の羽毛の形や、細い脚の煩わしさは自ずと消し飛んで、どうしても私には納得出来ないものもある。動物図鑑的な味気のなさを感じさせるものがある。このところに写生と写実、彫刻の素材などの問題があるように思う。それは彼がモデルに就いて詳しく知り過ぎていっているせいである。それを忘れるというのは無理である。それを突き抜けて、より深く探求して生きた形を掘り当てるのが唯一つの道だと思う。

空を切って飛ぶ鳥の鋭い流線、電気のような敏感さ、餌を目がけてとびかかる激しさ、厳しい鳥の生態が、まだまだ彼の制作欲を煽り立てて止まないことだろう。

私は彼と親しすぎるので批評の適任ではない。賞めすぎではサクラになる。ともあれ一人の作家が一つのモチーフに打ち込むことは尊いことである。

大分暴言を吐いたので、先日約束したギンバトはもう貰えないかも知れない、と。



作家山本常一を親友の舟越保武氏が「思いやり」でさわやかにつつみ、美しい。私も、世田谷の山本常一氏のアトリエに伺ったことがあります。下町ふうの家でガラス戸を開けて入った土間には、野鳥のカゴが身動きがとれないでつまって居た、上り口の六畳の間の飾り戸棚には大小の小鳥の作品が群れをなして賑やかに居た、此の居間で山本氏が私に話された“大自然と禅問答”の深い言葉が今も強く私の想いの中に在る。

それではみなさん 今回はこれにてお別れいたします。次回の広報で又お会いいたします。

新会員紹介

絵画部



片山 裕之

今年で31回目の挑戦でした。新制作展は挑戦できることに誇りのもてる団体だと思い、チャレンジしてきました。今は朽ちるものたちの色と形に魅かれ制作しています。これからも自分らしい絵を求め、「展開する／密度を高める」という意味を自問自答しながら絵と向き合っていきたいと思います。新制作は厳しいです。だからこそ作品が成長するのだと思います。会員推挙にあたり、初心を忘れず、緊張感をもって制作してゆきたいと思いますので、今後ともご指導よろしくお願いいたします。

◆1960年岡山県生まれ。1982年大阪芸術大学美術学部美術科卒業。1983年第47回新制作展初入選。第67、76回新制作展新作家賞受賞。

彫刻部



玉栄 広芳

思えば新制作展と初めて出逢ったのが1972年の第36回展で当時の公募展の中でも特に異彩を放っていた。この厳しい団体展の中で可能性に挑戦したいと思ったのは云々でもありません。以来出品を重ねるも想像以上にハードルが高く落選・挫折と試練の連続でそんな中、先輩会員の方々の助言を糧にコツコツと続けて30年余り奇しくもこの度は会員に推挙して頂き心より感謝申し上げます。今後とも宜しく願い申し上げます。

◆1942年沖縄県生まれ。1985年第49回新制作展初入選。第72、76回新制作展新作家賞受賞。

新作家賞 (*新制作協会賞)

■ 絵画部

板谷 諭使 海野 厚敬 柿原 康伸
金井 健一 鶴川 勝一 原田 早多子
山口 蒼平

■ 彫刻部

ゼロ・ヒガシダ* 青木 悠太郎
江村 忠彦 高野 正晃 田中 和之
濱田 卓二 松枝 源太郎



田中 直子

この度、新会員に推挙戴き有難うございます。激動の時代に自由を求めて結成された新制作協会の歴史を振り返ると身のすくむ思いがします。絵画に生命を捧げた恩師を思うと胸に迫るものもあります。アカデミズムに屈せず、清廉を貫いた諸先達の精神を少しでも受け継げればと思います。

新たな出発点に立ち、これから歩む道をさらに究めたいと願います。これまでは生きとし生けるものが樹木の生命に負っていることを表現したいと願っていましたが、これからは樹木の生命が負っている水、光、空気、時間も表現できたらと思っています。

◆1962年奈良県生まれ。1988年京都市立芸術大学美術学部美術科卒業。1988年第52回新制作展初入選。第68、75回新制作展新作家賞受賞。



佐伯 皖子

年に一度多くの作品を観て感動し、先生方に教えて頂き、それが翌年までのエネルギー源でした。又苦しい時は、励まして頂き、その時もやはり思いやりがエネルギー源でした。本当にここまで育てて頂き感謝しております。この度は会員に推挙して頂きありがとうございます。初出品からの目標だったので、夢のようです。と同時に大きな責任も感じます。自分らしさが素直に表現できるように精一杯頑張ります。今後とも宜しくご指導をお願い致します。

◆1947年兵庫県生まれ。1981年第45回新制作展初入選。1992年第56回新制作展新作家賞受賞。2012年第76回新制作展新作家賞受賞。

■ スペースデザイン部

五十嵐 史帆 五十嵐 通代 鈴木 未都
荻原 真輝

絵画部賞

安部 洋子 奥山 久美子 大道寺 里子
竹本 義子

損保ジャパン美術財団賞
永井 優

スペースデザイン部



伊藤 順

会員に推挙戴きありがとうございます。何をつくりたいのか、何をつくるべきか、何がしてくれるのか、何のためにするのか、これらを自問しながら制作をしてきました。答えはそうそう見つかるものではありませんが、この闘ぎあいそのものが、「つくる」ということなのかなあという気がしています。

今後も驕ることなく、自問しながらつくり続けていきたいと思っています。

◆1970年山形県生まれ。2000年上越教育大学大学院学校教育研究科修了。1998年第62回新制作展初入選。第73、75回新制作展新作家賞受賞。



松本 弘司

熱いエネルギーがぶつかり合う新制作展に作品を置いてみたい。その始まりから、彫刻で何を語りたいのか、その問いかけを目一杯の仕事で会に出す中で、少しずつその世界が見えてきた様に思います。それは、新制作協会という厳しい場によって自身を見つめる事が出来たからです。今回、会員に推挙して頂いた事に対して、私がそれに値しうるものなのかを、これから、作品と生き方で応えてゆかねばという気持ちです。よろしくお願いいたします。

◆1952年岐阜県生まれ。1975年名古屋学院大学経済学部卒。2002年第66回新制作展初入選。第75、76回新制作展新作家賞受賞。

訃報 (平成25年11月末現在)

新制作協会発展に尽力されました故人を偲び、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

渡辺 恂三
絵画部会員



平成25年8月12日逝去
(享年79歳)

受賞作家展

■ 絵画部

2014年1月20日(月)25日(土) 11:00-19:00
 [初日] 13:00~ [最終日] 18:00終了
 会場: 銀座井上画廊 TEL.03-3562-1911
 中央区銀座3-5-6 (松屋前) 井上商会ビル3F
 ● オープニングセレモニー: 1/20(月)17:00-18:00
 ● オープニングパーティ: 1/20(月)18:00-20:00
 会場: 「えん」銀座店 TEL.03-3538-5496

■ 彫刻部

2014年2月10日(月)21日(金) 11:00-18:30
 [最終日] 17:00終了、2/11,16は休廊
 会場: ギャラリーせいほう
 中央区銀座8-10-7 TEL.03-3573-2468
 ● オープニングパーティ: 2/10(月)17:00-18:00

■ スペースデザイン部

2014年2月10日(月)2月15日(土) 10:00 -19:00
 [初日] 13:00~ [最終日] 17:00終了 (会期中無休)
 会場: 建築会館ギャラリー
 港区芝5-26-20 TEL.03-3456-2051
 ● オープニングパーティ: 2/11(火)17:00-19:00

● 入場者数

第77回新制作展の入場者数は、全日程合計:43,606人
 (無料・一般有料入場者合計)でした。

● 巡回展

○ 京都展
 10月19日(土)~10月29日(火) (10/21・28休廊)
 京都市美術館
 ○ 名古屋展
 11月26日(火)~12月1日(日)
 愛知芸術文化センター/8Fギャラリー
 ○ 広島展
 12月10日(火)~12月15日(日)
 広島県立美術館県民ギャラリー

● 新協友

【絵画部】
 原田早多子、高堀裕子、河島鏡子、今井宣子、
 荻田秀治、木下担江、鶴川勝一、山口蒼平、
 坂口卓平、武田雪枝、平松幸雄
 【彫刻部】
 青木悠太郎、高野正晃、田中和之、濱田卓二、
 松枝源太郎
 【SD部】
 五十嵐史帆、五十嵐通代、鈴木未都、萩原真輝



● 第78回 新制作展の開催案内

開催期間: 平成26年9月17日(水)~29日(月)
 搬入受付: 平成26年9月3日(水)、4日(木)
 (各部の一般作品及びSD部のミニアチュール作品)



伝言板

● 国立国会図書館への図録、広報誌の納本と過去の図録寄贈のお知らせ

今年度から国会図書館へ、展覧会図録・記念誌・61号以降の広報誌を納本する事になりました。協会事務所で保存している図録の調査をし、32回展~77回展までの図録、記念誌をそろえましたが一部欠番があります。そこで、欠番となっている下記の号を寄贈してもよいとお考えくださる方には是非ご協力をお願いします。ご協力を頂ける方、協会事務所までご連絡お願いいたします。
 ・寄贈対象図録: 1~31、35、36、39、40、44回

● 精神造形への挑戦一荻太郎 展

会期: 平成26年1月19日(日) ~ 3月16日(火)
 10:00-17:00
 会場: 蕨崎大村美術館 / 山梨県蕨崎市神山町鍋山1830-1
 TEL / FAX: 0551-23-7775
 内容: 蕨崎大村美術館が主催するもので新制作協会が後援しています。

● 「公募団体ベストセレクション美術2014」展の開催案内

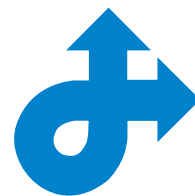
会期: 平成26年5月4日(日) ~ 27日(火)
 会場: 東京都美術館 公募展示室ロビー階
 第1・第2展示室、ギャラリーA、B、C
 内容: 油彩画、日本画、水彩画、版画、彫刻 (スペースデザイン含む)、工芸

編集後記

年々各部とも運営の厳しさが増しているようですが、広報委員会は情報交換の場でもあります。風通しの良い雰囲気、充実した紙面づくりを目指したいと思っています。



【編集部・永津守】



新制作協会

〒110-0013
 東京都台東区入谷 2-4-2 増田ビル 202
 Tel: 03-5603-8350 Fax: 03-5603-8360
 URL: <http://www.shinseisaku.jp/>
 E-mail: webmaster@shinseisaku.jp
 発行/新制作協会
 企画・編集/広報委員会広報誌編集委員
 千葉文隆、辻井久子、岡孝博、
 永津守、中野威
 監修/谷 浩二
 製作・印刷/株式会社ベクトル
 発行日/2013年12月吉日

* 広報委員会では、新制作展に関わるニュース、伝言、ご批判、ご意見をお待ちしております。お気軽にお寄せください。次号をご希望の方は協会事務所迄ご連絡ください。